チョルことば

藤原與一

一

「何々しチョル」「起きチョル」「寝チョル」といふやうな「チョルことば」は、中央に於ける史上の文獻には見出し難いもののやうである。等しく拗音のある「ヂャ」「オヂャル」「オリャル」などはかなり多く見えてゐるが、同じく一種の拗音を持つた「チョル」は目につかないのである。然るに、現代地方語の上では、これが旺に行はれてゐるのを見受受ける。

その第一は九州地方である。初に印象深い例として西郷南洲翁征韓論の口述筆記から一例を引くと、太政大臣三條公に向かつての言葉に、

オハンナ、……ワタシドンヨリ後ニ生キ殘リマセウカラ、只今申シタ事ハヨウ覺エチョッテ下サレ。

の如く、「覺エチョッテ」とある。鹿兒島縣下にチョルことばが旺なことは、小説「南の風」や「海軍」によつても著明になつた。

いゝや、そげんことあはん。貴人なんどは、生好かんどつ、いっちょいもしたど。（「海軍」隆夫母）

宮崎縣南方の一例を擧げれば、

ドキーイコートコキーイコートダマッチョレー。イランセッヂャ。（どこへ行かうとこゝへ行かうとこちらの勝手だ、默つてろ。いらぬお世話だ。）

の如くである。調査の結果では、九州も南方に行くほどこれの旺な狀態が認められ、佐賀縣・福岡縣等はそれほど盛んにはないらしい。薩隅地方は、九州中でも特によく室町期頃の言語狀態を止めてゐる所と見られるが、チョルことばもこのやうな南方に至るほど優勢な狀態になつてゐることは、この言葉の歴史性を何ほどか示唆する

ものであると思ふ。

チョルことばは九州方言の一特徴と言へる。次は九州に隣接する中國四國の狀況であるが、中國山口縣下のチョルはかねて有名である。同じやうな狀態が山陰の出雲地方及び隱岐にも見られる。但し出雲などのは、例の發音癖によつて、チョルの「ル」が明瞭を缺き、[r]音が殆ど聞えない。山口縣下の狀態は東に續いて廣島縣下にも見えるが、これは主として安藝郡下の島嶼に多く、安藝國の內陸部や備後にはあまり見えず、かくて岡山縣下はもはやチョル地帶でない。山陰も出雲以東は見えないやうなのであるが、記錄によれば、兵庫縣城崎郡三椒村字三原に、

爺々、何しちょる。（猿爺）〔昔話研究二ノ八「猿の犯入」〕

がある。これ以東には記錄にも見えないやうである。たゞ疑問となるのは、愛知縣葉栗郡淺井町の

モーケチョル〔地方語讀本〕

であるが、暫くこれを預れば、本土の今擧げたより東では、その例がまづ無いと言つてよいのである。

轉じて四國はと見るのに、これ亦その西南部にチョルが著しく、續いて土佐一帶は凡そチョルことばの地域と見ることができる。「寢てゐる」では、「ネーチョル」等の形も見えるのである。さうして、右以東にはもはやチョルが見ない。常は四國南半と深い關係を示しがちの南近畿がやはりさうなのである。

二

まづ明らかな九州の狀態から見始めて、中國以東及び四國のこのやうな分布狀態を見る時、どのやうなことが考へられるであらうか。分布は要する所、九州を中心に半輪形をなすものである。中央の史的文獻上に殘つて見えることなく、又京畿地方の現代語にもなく、更に又當今の主勢力である東京語中心の所謂標準語にもなくて、地方にだけこのやうな分布を示してゐるのを以てすれば、之を全國の見地から言つて殘存的分布と稱することは許されるであらう。

抑、こゝに示された分布の樣態そのものは、國語方言の分布上、注目すべき史的殘存の一形式と言へるもので

あつた。一體、九州方言が古脈に屬することは、例へば二段活用が今も口頭語の上に行はれてゐるのによつても領かれよう。國語を諸方言について見た時の九州が、東北などと共に日本語の古い狀態を示すものであることは、今日一つの結論として提示し得ることである。ところがその九州內部に於ても、所謂、薩隅方言・肥筑方言・豐日方言の區別が認められるのである。之を方言の分布系統の見方から解釋する時は、第一に薩隅方言が就中古色に富むものと見られ、これに肥筑の方言殊に肥後肥前の方言がよく連なる。この線が古脈の尤なるものとして一つの層或は一段階をなし、その西海中の島々更には南部地域に寄るほど古色を豐かにして、これが南島列島の一層古い地帶へなだらかに連る。日向より斜に筑前へかけては第二段階的な間衝地帶をなし、次いで豐後豐前の一區域が第三段階の地として認められる。先の九州の古脈も、實はこのやうに見分けられるのである。チョルことばの九州全土に於ける消長狀態も、一面これに合はせて考へてみることができる。北方に於て南方ほどのものが見えないとすれば、それは宛も右に述べたやうな內面的事情に合致する。さうすると、これの殘存的分布の有樣は、九州內部だけを見ても明らかなのである。

中國本土では西寄りに特に山口縣下に於てチョルが旺なことも、九州との關係が他の事例についてと同樣强く考へられるだけに、九州のチョルの殘存分布の形勢を、一層自然なものに見させる。逆にして言へば、山口縣下に旺なチョルも、前述のやうな九州との關係から、國語全體としては、殘存分布の形勢下にあるものであることが明らかなのである。それが山陰側に續いて多く見られ、殊に隱岐にもあることは、山陰が山陽よりも一時代の古さを以て九州に繫がることをよく示すものなのである。山陰は、中國に於て、九州との系統上の連繫を一層明らかに見せる地帶と言へる。東の但馬に用例の見えたことも、但馬は東隣の奧丹後と共に中國山陰側と同一傾向にある關係上、見えて故なくはない。山口縣下に續いて廣島縣下が、特に西南部にチョルを多く見せてゐることは、それだけを山口・島根との關係から見れば解し難

いことのやうであるけれども、一度四國に於けるチョル分布を見るならば、了解を得るに難くないのである。

四國は特に西南部に多い。こゝに九州との密接な關係が想察される。中國の山陽側の狀態は、四國のこの狀態と相共に、結局は九州との關係下に見出される分布なのである。四國西南部の狀態が土佐一帶に及んでゐることも、例の土佐の古脈性を示唆するものであつて、土佐は、中國に於ける出雲の如く早くから特別に注意されてきたのであるが、今やチョルことばの分布を眺めても、結局は國の西南卽ち九州地方に連なるものと考へられるのである。方言上、四國では土佐、中國では出雲地方が、それ〳〵卓立した特殊地區のやうに見られがちであるけれども、今チョル分布に隨へば、その各〻が必ずしも偶然の事實ではないことが推測され、且兩者は九州地方を仲介にして一系上に在り、互に手を繫ぐものであることが知られるのである。

要するに、チョルことばの分布を通じて、我が方言分布の古脈地帶を、系統發展の線に添つて見取り得る。つ

いでながら、紀州の二段活用もかゝる南海道線の一端に見られるものである。出雲のズー〳〵辯は南方薩摩のズー〳〵辯に通ふものであり（〔r〕子音の所謂脫落も出雲・九州が軌を一にし、又日本海沿ひに山陰的なものの續いてゐるのを順に辿れば、東北地方のズー〳〵辯がこれと一系をなしてゐるのを見る。

チョルことばの分布は、かくして注目すべき方言分布相を示したのである。こゝに一つの文字通り國語の現狀と言へるものを見る。國語教育實施の場所がまづこのやうなものであることは輕視できない。我々は屢々たゞの理論にのみ走つて國語の教育を論じがちであるが、常に一方に於て必要なことは、國語教育を實踐すべき場所柄がどのやうになつてゐるかといふことである。この意味に於て、チョルことばの全國に於ける分布の樣相は、國語教育を施行する上に、一つの重要な視點となつてくるのである。

三

一體チョルといふ言ひ方は、いつの頃から起つたもの

であらうか。近古の頃になると、國語は特に大きな動きを起し始め、今日の國語の狀態の基礎は、少くとも室町末元祿頃までには出來上つたやうであるが、この間、いろ〳〵の現象は相伴つて起つた。その中心には、一つの根本的な國語史の動力とも言ふべきものが考へられる。「お入りある」がオリャルになつたことや「お出である」がオヂャルになつたことと、「で・ある」からヂャが出來たことにしても、何等か相伴つたことであつただらう。そこに繫がるものとして「て・をる」からチョルへの推移が考へられるかどうか。總じてこの種の熟合が生じたことは、それ〳〵なりに無理ではないことと言へよう。「おで」と「ある」とが重なると、これが新しい一體のものとなつて、やがてオヂャルといふ纏まつた言ひ方になる。「で・ある」が一つの助動詞として用ひられるに至ると、それは新しい一體のものとして、その語獨自の機能に隨つて、獨自の形態を完成した。ヂャ乃至ダが卽ちそれである。「て・をる」がチョルになつたのも、或は一面に於て同じやうな性質に屬するとも見られる事柄であつたか。「で・ある」と「て・をる」とでは條件が相違し、「で」と「て」と直接に比較し難いのと共に、「ある」と「をる」とも音相が異るので、簡單に右の兩者を對比することはできないが、一つの性質として、「で」と「ある」との重なりがやがては熟合を遂げたのと同樣に、「て」と「をる」ともゆく〳〵はチョルの熟合を遂げるといふ傾向だけは、相通じて存したことかと考へられる。そのやうに見ると、「で・ある」などの上に熟合が起つた頃に何ほどかの關聯をもつて、「て・をる」の上の熟合も見え始めたのではないかと推測することも可能になる。然し、全く同一性質に屬する事柄なら、時期も相距ること遠くなく發生したであらうと考へることも無理でなからうが、この場合はそこまで行かないので、直ちにその發生期を相接するものと斷定してしまふことはできない。隨つてチョルの成立期をこゝに決定し得るには至らないが、たゞ先に述べたやうな九州地方の狀態を以てすれば、さほど後代に下るものでもないかと考へられるのである。九州に於ては別に又「行つて

みて」等を「行つチみチ」のやうにも言つてをり、關聯して四國西部の南豫にもこれが見られるが、このやうな「て」をチとする言ひ方も、「て・をる」からチョルへの推移を考へる上に、併せて注意すべきことであらう。

四

今日チョルことばは次第に減退しつゝあると見てよからう。中國地方人士の間であると、之を卑しいと感ずることが、漸次廣まつてゆくやうである。尤も一概には言へない。現に九州では、「承つチョリます。」（豐後）のやうに、中年の紳士でも、話言葉としては、之を上品な生活語にしてゐるのである。今日チョルの旺な地方は、卑語感を自覺したりするやうな機會の少い方言狀態一般の內に置かれてゐるものと見ることができよう。例へば薩隅地方人の如きは、その土地語の中に住んでゐると、チョルだけが特別に際立つたものにはならないのである。然し、今やそこに新標準語が入るに及んでは、卑語感も生じつゝあることは否めまい。

卑語感を生じてきてゐることは、一つにはチョルを言はない新標準語の影響の浸潤といふことから說明することができようが、尙一つには、新標準語又は東京語への規範意識如何にかゝはりなく、チョルといふ言葉そのものに對する我々の言語感情がさうさせるのだといふこともできはしないかと思ふ。卽らチョルを聲に出して言つた際の感じがさうさせはしないかと考へてみるのである。自己の鄕土語、生活語への反省が起り始めると、チルの音感についても、やがてその美醜を判斷し得るやうになると思ふのである。その反省の機會を與へるといふ點では、新標準語の入來が預つて力のあることは言ふまでもない。

事情はどのやうであらうとも、チョルことばの今日陶汰されてゆく情勢は、大體に於て之を認めることができるやうである。

五

そのやうな現在のチョルを熟視する時、之を明日以後にも備へようとする眞の標準語（この場合は標準語法）として立てることの無理なことは、多言を要しないであら

う。人はチョルの言葉を耳にしただけでも、これが標準視できないことを速斷するかも知れない。然し、標準語を具體的に組織するのには如何にすべきかを考へて、それに應ずる手順をとることは必要である。

標準語をどう見るかは未だ區々であつて、諸見の一致は認めかねるが、何れにしても、國語の標準は、日本語全體の上の動向を觀察しそこに日本語の特性を捉へることによつて、具體的に設定せられるべきものであらう。その點では、標準語は、人爲的な規範でも又必然としての過程でもなくて、歸納的觀察に價値的歴史觀を加へた當爲なのである。

このやうな標準語の體系は容易に實現し難いものであるとすれば、我々は一歩々々とこれの樹立設定に力めなくてはならない。言葉の生活にあつては、一事の轉移改善が能く全局を動かす。それは正に將棋の盤面に於ける一手の意味に等しい。この故に、實際には一歩々々と理想に近附ける方法のとられることが決して惡くはないのである。その一つ々々が、研究詮議によつて選ばれたものであるならば理想的である。

チョルことばは標準語（標準語法）に立て難いとすると、これは「て・をる」に解いて教育することが適切になる。これが卽ちチョル方言醇化の道である。「てをる」でなく「てゐる」までを一擧に要求すべきかといふのに、直ちにそこまでは要求しないのが穩當であらう。一歩々々と言ふのからは又、一事に急なのは採る所でない。チョルことばの人々に「てゐる」を直ちに與へても、それには容易に親しみかねるものがある。まづ一應は「てをる」の廣みに出させ、後は順のつくのを待つことにして、多少の餘裕は置いてやるといふのが親切である。チョルが「てをる」に改まつた段階に於ては、以前と相違した言語感情が生まれて、そこには必ず自己發展の新しい可能性が生ずるはずである。

「て・をる」からのチョル、「て・ある」からのチャル等と共に、「て・をる」からのトル、「て・ある」からのタル等もあつて、「チョルことば」の問題は係る所が少くない。さうして、これらは更に、相關係する多くの事柄に見擴げてゆくことができるやうである。實はそこまで考へて國語表現法の特質的構造とその教育を述べることが本意であつたが、それに及ぶことができず、今はたゞに一つのことを、それも極めて簡單に記すのみに終つた。

（昭和十八年七月八日）